

幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.20
平成12年9月2日

仲間づくりのために



会長 新堀 豊彦

観世鎮之丞師がなくなった。私と同年である。横浜能には一度も出演されなかった(?)と記憶するが(ごく初期には出られたかもしれない)、横浜へは時々お見えになり、力強い舞台を何度か拝見したことがある。これも横浜能楽堂が出来たことによる大きな恩恵で、各流の一流のシテ方の芸を横浜で見れることの楽しさをしみじみと味わっている昨今である。

が、それにしても能楽界の長老級の方が、以外に早く亡くなられる例が多い。観世の先代宗家も、又同じく横浜に縁の深かった元昭師も皆これからという年令ではなかっただろうか。人生八十年の時代となり、世阿弥の頃は五十才になれば舞台に立つべからずという位、老い込みが

早かったのに比較すれば、梅若恭行師のように「関寺小町」を八十才になって元気に舞われるような時代である。まあ、これは例外であるにしても能楽師の方々は、余程体力に恵まれていないと勤まらないことも確かである。幼い頃からのきびしい修行、人間のなし得る最高の努力の積み重ねをされている先生方の芸は、本当に崇高なものである。貴重なものであるといわなくてはならない。

私たちは安易にお稽古をつけて頂いているが、本当はもっと緊張し、全力で先生にぶつかって一分一秒、一言一句粗末にしてはならないという気がするのである。理屈抜きの、体と体、気と気、肌で感得する能や謡曲の深さに思いをいたす時、私た

ち素人、愛好者は、後継者づくりについてこれからどうしていったらよいかについて、深刻に悩まざるを得ない。

能楽堂で試みられている様々なワークショップ、いわゆる入門ガイド的な試みは大きな力であるが、この稽古の難しさからいって、半年や一年ではどうにもならないから、いかに継続性を持たせるかが問題になる。

私たちは楽しんで稽古し、舞台にあがらせて頂いているが、能をとりまく環境づくりにもっと目を向ける必要があるのではないか。能を鑑賞する人口は段々とふえているが、(第四十八回横浜能のチケットは、上演二ヶ月前に完売、能楽堂自主公演の場合は毎回ほぼ発売日に売り切れ)同時に、謡曲や仕舞をやってみようという愛好者をふやすための努力も期待される所である。

第十六回 横浜五流能楽大会を終えて

常務理事 金剛流 望月 悦夫

当連盟が主催し会員が出演する標記の大会は、平成十二年五月二十七日(土)例年通り横浜能楽堂の本舞台で開催された。

同じく当連盟が主催する五流交流大会が毎年開催されるよう

になり、能楽大会の方は各流が力のある演者を揃え、出し物を競うように充実した舞台がくり広げられました。

当日は天候にも恵まれ見所にも大勢の来場者を迎えて出演された方々も満ちた心で心地で謡い、舞い終えたことと思われます。

今回は金剛流が当番で出演募集、番組編成から当日の運営をお手伝いしました。色々不行届きもあったと思いますが、役員および各流の責任者と出演者各位のご協力により大きな過誤もなく附祝言を謡い納めることができました。改めて感謝申し上げます。

今大会は午前九時三十分始曲、午後五時三十分終曲の四百八十分で計画され、合計四百七十二分の申込みを受けました。

毎回反省の話題になっていた時間超過について今後の運営のデータを取るためストップウォッチが用意されたので、各出し物の切戸の開き

から終りの切戸閉めまでの計時を行いました。

結果は計測した正味出演時間の合計が丁度四百八十分で、見合の出し引き等の

各流別出演記録

	演 目 (番)				使用時間(分)	
	連	仕	他	計	予	実
観世流	4	6		10	90	96.7
(観)梅若会	2	4		6	85	78.4
宝生流	4	4		8	88	94.0
喜多流	2			2	32	28.2
金剛流	1	7		8	50	48.2
金春流	1	6	1	8	50	48.4
海謡会	4	2	2	8	67	69.8
下掛宝生流	1			1	10	11.0
合 計	19	29	3	51	472	480

始曲 9時30分、終曲 5時58分(508分)

段取りに費やした時間が不足して二十八分の超過であった。今後の番組編成に当たってこの時間を予め見込んで予定通りの進行を計ることといたします。

次回第十七回の大会は平成十三年五月二十六日(土)に予定されております。



余技の必要

副会長 高岡 幸彦
観世流

私が高商時代石井眞峰さんと
言う僧籍の英語の教授がおられ
た。後に鎌倉の光明寺の大僧正
住職となられた高僧である。こ
の先生がある時「無駄の必要」
というのを知っているか、と我
々学生に問われた。私は何だか
判らずにいる時先生は「橋を渡
る時、橋が足の中だけだと渡れ
ないでしょう。他の部分は使わ
れないけど必要なんです」と教
えてくれた。

私も八十才を間近にひかえて、
人生を省みると人生にも同じ様
に余技の必要という様な事があ
ると思う。これは或時はスポー
ツであり、又ある時は趣味の世
界であってもよいと思う。私自
身学生時代は弓道部に入って猛
練習に従った。弓道という和最
近女学生が盛んで、やさしいス
ポーツと思われがちだが当時は
きびしい稽古で、稽古が終わる
と家に帰って食事をしてバタン
キューであった。従って学生時
代を色々な誘惑にまきこまれる
事もなく、又高商の三年の時は
一年弓道をやめて商大の受験一
本にしぼったが、受験勉強も最
後は体力である事を知り、それ
迄弓道で身体を鍛えておいてよ
かったと思った。そして大学に

入り又弓道部に入り、弓道部の
友と一緒に謡曲を習い始めた。

その後社会に出てスポーツは軟
式野球、ゴルフと変わったが謡
曲も師匠について続けていた。

野球もゴルフも社会人として楽
しい生活を与えてくれ、サラリ
ーマン時代のストレス解消に大
いに役立ったと思う。その後体
力のおとろえと共に野球は無理
となり、ゴルフも数年前に腰痛
が出てやめた。七十二才となっ
て本業から引退した時残ったの
は趣味として続けてきた謡曲、

学生時代楽しんだ将棋であった。
将棋は中学時代の同期生にすす
められNHKの講座を受け、ど
うにか五段迄頂いた。又謡曲は

田辺先生の御推薦を頂き名譽師
範を頂き、しばらくはその俥で
いたのであるが、先生から近く
の磯子センターと鎌田の産學学
園への出張指導を御紹介頂き、

その後久良岐能舞台の初級コー
スをお引受けする事になり、吉
田町青年ホール、根岸地区ク
ラブと稽古場もふえ、忙しいが

充実した毎日を送っている。こ
れもサラリーマン時代の余技の
恩恵と感謝している昨今である。

入りの又弓道部に入り、弓道部の
友と一緒に謡曲を習い始めた。

横浜梅若

素謡と仕舞の会開催に寄せて

常務理事 杉山 淑朗
観世流梅若会

去る七月十九日(水)、横浜能楽
堂本舞台で、日本芸術院会員梅
若恭行師を始め、諸先生を招聘
して「横浜梅若素謡と仕舞の
会」を開催した。梅雨明け早々
で晴天に恵まれ、出足への心配
がなかったのは幸甚。

開始後間もなく、能楽堂の女
性職員から「恭行先生は見えて
いるのですか」と問われ「恭行
先生も他の先生方も十時前には
見えます」と応じると「豪華
版ですね」との返事。一流の能
楽師八名を招いての素人の会は、
正しく豪華版そのもの。

先生方が地について下さった
ので、場内は一層独特な雰囲気
を醸し出し午前十時から午後四
時まで、一管一・素謡六・仕舞

二十九、計三十六曲。出演者約
百名による熱演は終始見所を魅
了した。正面席は常時満席の状
態で、中正面席も程々に埋まり

盛会裡に終わった。

夜は開洋亭で先生方と記念写
真を撮り、窓外に広がる横浜港

一帯の夜景を眺め乍ら、一時の
会食を楽しむ話しは大いに弾ん

だ。

諸先生には過密な日程の中を

終日お付き合ひ頂き流友一堂に
会して、二千年の節目の年を最
高のレベルで締め下されたこと
に心から感謝申し上げる次第
です。

顧みれば昨年九月実行委員会
を設置、堀内会長を中心に全員
力を合わせて準備を進めて来た。
企画を具体化するプロセスは



感じの稍縦長の楷書体でレイア
ウトも良し、例えば地謡座が偶
数のとき、曲目の中心線に合わ
せる為の操作もこと細かに行わ
れており労を惜しまぬ御協力に
この場を借りて厚く御礼申し上
げます。

印刷は市民に開放している役
所の印刷機を利用、製本は数人
の手作りによる等、番組作りは
一貫したボランティアの為製作
費は格安で上げることが出来た。
又、今年二月以降は外部から
弁当を取り寄せることになった
ので受け渡しに手抜きがない
ようグループ単位で個数を申し
込んで貰い、業者には、前記内
容を書いた「弁当注文書」を発
行した。準備が整い安堵したの
は開会四日前であった。

皆様の御協力と御支援により
無事終演出来て有り難うござい
ました。



横浜能楽連盟の年二回の恒例行
事と余り変わらないが、番組編
成作業は先生方と共催の部分
があり、例えば、原案は実行委員
会で作成、先生と打合せ乍ら校
正を重ねた為日程が詰まり逼迫
する場面があった。

原稿は中学二年の少女にワー
プロで打って頂いた。柔らかな

先代山本東次郎師のこと

横浜高砂会 江波戸菊代

もう四十年位も前のことにな
るでしょうか。春の大会「樹会
(主催 青木只一師)の時、私
の母が素謡籠太鼓を狂言入りで
させて頂くことになりました。
そして東京杉並区の永福町にお
すまいのおワキをしてくださる
仲良しの相弟子さんのお宅へ山
本東次郎師にお出願って合わせ
て頂くことになっておりました。
ところが何とその申し合わせの
二、三日前から感冒で寝込み、
とても当日にも起きられないで
あるうと、急遽、私に代役をと
言うことになりました。お舞台
での師は度々拝見しておりまし
たが、同じ舞台でさせて戴ける
などとは夢にも思わないことと
して。

お申し合わせが済み御食事の
後のお茶を頂きながら、私のこ
とをおワキの奥様がやや詳しく
ご紹介くださいますと、師は
「私も子供の頃は横浜で育ち、
老松幼稚園へ通いました」とお
っしゃったので「え、それでは
私の幼稚園の先輩でいらっしゃる
います」と思わず驚きと喜びの
混じり合った声を出してしま
いました。お蔭様で当日も無事に
済み私にとっては幸運そのもの
の出来事で、今もあの永福町の

お家で初夏の陽射しと共にその
日横浜で港祭りが行われていた
ことも話題の一つだったことを
思い出します。師が横浜でお育
ちになったのは「父が商館につ
とめておりましたので」とおっ
しゃっていらっしやいました。
家で父にそのことを話しました
とき父は、まだ筒袖をお召の頃
からの師を存じ上げていると言
っておりました。

現在の御子孫のお立派な御繁
栄ぶりと横浜能楽堂でのご指導
ご普及に一方ならずお力入れ下
さる現東次郎師御兄弟の御様子
を師の御霊はどんなにかお喜び
のことでしょうと拝察申し上げ
ております。



こころの声

横浜喜多会 大館 惺雄



私はこの幽玄に寄稿される外
の方々にように、「能」を体
系的に勉強もしていないし、
「謡」も仲間についてゆくのが
精一杯というレベルである。ま
して囃子とか仕舞に至っては全
く論外である。ただ観能はきら
いではない。あの簡素な能舞台
で演じられる舞、囃子、地謡の
絶妙なアンサンブルの醸し出す
静謐な緊張感、自分の精神を、
いつの間にか天国にあるような
馥郁とした雰囲気の中に溶けこ
ましてしまうような力を持つて
いる。

私の経験では、能は舞が良く
囃子が立派であっても、地謡に
乱れがあったり、声のひびきが
足りなかったりすると、その舞
台の魅力は半減してしまうよう
に思う。地謡が良いと観能の印
象は非常に良いものになる。こ
の七月に宝生能楽堂で演じられ
た梅若六郎師の「逢坂物狂」の
地謡は実に堂々としたものであ
った。深みのある男性的な声の
ひびきといい、抑揚の利いたド
ラマチックな歌いまわしといい、

申し分のないもので、自分も一
度で良いからあのような謡いを
してみたいものと思ひながら聞
きはれていた。

ところで、あの地謡の声の訓
練はどのようにするのであるう
か。

野上豊一郎氏の名著「能の
話」(戦前版 岩波新書)の中
に、能は観るものか、聴くもの
かという問いかけがある。答は、
能は観ると同時に聴くものであ
るといふことで、私も全く同感
である。ところが能を語る名人
の芸談にも、また色々な人の
「能随筆」にも「声」のことに
は余り触れられていないのでは
ないかと思う。

個人的なことでは恐縮であるが、
私は若いときから「合唱」の魅
力にとりつかれ、いまだにそれ
を続けている。この世界では演
奏の前提は「発声」である。発
声が悪いと音楽にならない。練
習の半分は発声と呼吸法である。
また発声を論じたテキストは沢
山ある。

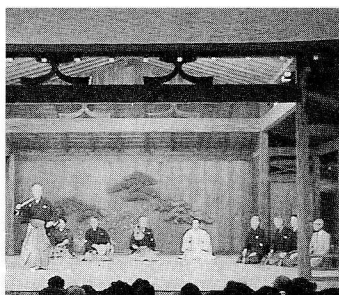
「謡」にこれがないのが何か
物足りないような気がする。

喜多実師の「演能前後」に
「こころの声」と題した一節が
あり、これは「謡」の発声につ
いて述べられた少ない例ではな
いかと思う。

曰く、謡曲は西洋音楽の様に

発声法を理論的に究めるような
ことはしていない。発声法はめ
いめいが一生かかって、それぞ
れの発声を探し求め、そして探
し当てたときその人の芸は完成
する。こころ声に発声、である
ということである。

この言葉に触れたとき、私に
は「謡」はまだまだ遠い世界に
あって、自分の年令を考えたと、
日暮れて道遠しも止むと得ぬこ
とかなと会得した次第である。
(浜友会)



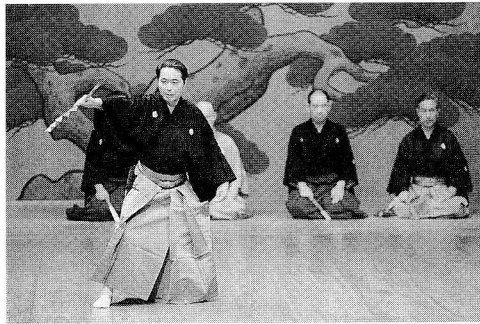
第16回五流能楽大会 舞囃子(胡蝶)

謡、仕舞そして囃子

宝生流教授囃子会
神奈川県支部理事

吉田 澄夫

初めて能を観たのは高校二年の頃です。曲目やシテの舞台姿は忘れましたが、笛のヒシギに背筋に電撃が走るほどの衝撃を受け、鼓方の荘重な掛け声に圧倒されたことはよく覚えています。この体験が私に能楽への眼を開いてくれました。実際に謡に触れたのは、大学の新入生オリエンテーションが行われた駒場キャンパスで、宝生流の学生サークルの方に誘われて謡った「班女」です。稽古を始めて三ヶ月、満足に謡本も読めないのに「謡曲大会に地謡で出なさい」と言われ吃驚仰天、恐れをなして退部してしまいました。しかし、七五調で綴られた詞章の流麗さ、西洋音楽に耳慣れた私に不思議なやすらぎと共感を与えたヨウ吟の謡の美しさに魅了され、宝生流のラジオ放送がある謡本片手に聞き入ったものでした。もう一度稽古をしたいと思っていたところ、縁あって宝生流教授囃子の先生に巡り会い、文字通り手取り足取り教えて頂きました。お陰様で、謡会で先輩方の謡を聴く毎に「どうしてあんな声が出るのだろう、私にだせるのだろうか」と悩んだものでしたが、何時とは無しにこ



の悩みも消えていました。謡う楽しさを知ると次は仕舞です。それまでも個人の会などで舞うことはありましたが、教授囃子会全国大会（平成三年）の晴れの舞台にたつ機会に恵まれ、これを契機に大坪喜美雄師にご指導頂くことになり無事「山姥」を勤める事ができました。室町時代から今日に至るまで幾多の先人と天才が心血を注ぎ磨き上げ、完成した能楽には、観能の楽しみ以外にも謡の詞章を原典や本歌に遡って調べたり、能面や能装束を美術品として鑑賞したり、自身が謡い舞うなど色々な楽しみ方があるようです。私の場合には五感のなかでは音への感覚が強いらしく、能のもつ音楽性に何よりも惹かれています。

各人の声色が揃い、膨らみと厚みを持った地謡と、裂帛の気合いを込めて打たれる鼓が紡ぎ出す音を聴きたく能楽堂に足を運ぶのです。そして遂に謡、仕舞だけでは飽きたらぬ囃子（太鼓）にまでのもり込み、稽古を始めてはや十年が過ぎました。稽古の年月を重ねた分、能を観る度に新たな感動を覚えることも増えました。頭の中が真っ白になった初心の頃の失敗も減りましたが、舞台度胸がついたのでは無く、馬齢も重ねた分、若かりし頃の感受性が衰え周囲に鈍感になっただけのことと自戒しています。稽古をすればするほど、新たな課題が出てきます。夢中になれる趣味を持たず幸せをしまじみ感じます。舞台上上がった時の身の引き締まる緊張感を忘れぬように、これからも精進を続けたいと思います。

！……………！

能楽堂だより

九月～十二月の公演・講座

横浜能楽堂では以下の通り公演・講座を開催致します。

「第十八回定期公演」

十一月二十三日（木・祝）午後二時。能「融」（宝生流）三川淳雄、狂言「成上り」（大蔵流）善竹十郎。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。チケット発売は十月二十一日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「第十九回定期公演」

十二月十六日（土）午後二時。能「通小町」（金剛流）豊嶋三千春、狂言「菊の花」（和泉流）野村又三郎。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。チケット発売は十一月十八日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

「講座『映像で見る二十世紀の名人』」

第四回：九月十六日（土）

「喜多六平太の『羽衣』」ゲスト・栗谷菊生（シテ方喜多流）。第五回：十月八日（日）

「梅若万三郎の『道成寺』」ゲスト・梅若万紀夫（シテ方観世流）。

第六回：十月二十九日（日）

「松本長の『籠太鼓』・野口兼資の『山姥』」ゲスト・近藤乾之助（シテ方宝生流）。

第七回：十二月十日（日）

「櫻間道雄の『石橋』」ゲスト・櫻間金記（シテ方金春流）。

聞き手・山崎有一郎、司会・後藤美代子。いずれの回も午後二時開講。全席自由席。二千元。チケット発売中。お問い合わせ・お申し込みは、二六三・三〇五五まで。

編集後記

▽昨年同様、今年の夏も連日三十度を越す猛暑が続きました。この暑さのなか各流の執筆担当の皆様にはご協力くださり原稿は予定どおり集まりました。これからよろしく願っています。

▽前号第十九号に掲載いたしました金春流吉川正雄氏の「能に魅せられて」の記事中「桜間引川師」とあるは「桜間弓川師」の誤りでした。お詫び申し上げ訂正いたします。（MS記）

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233-0013 横浜港南区丸山台二丁目
二九一七 新堀方

FAX 〇四五―八四四―一九〇三

●電話の場合

横浜能楽堂 原田由布子

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇